

1 調査と研究

飛鳥藤原京の発掘調査

飛鳥・藤原地域では、2000年度に20件の発掘調査・立会調査を実施した。以下、主要なものについて述べる。

藤原宮関係の調査は9件。朝堂院の学術調査(第107次)は、昨年(第100次)調査区に南接する地域を対象に、朝堂院の東第一堂北半部と東面・北面回廊および先行条坊の解明を目的としておこなった。その結果、東第一堂は四面に廂をもつ南北棟礎石建物だが、日本古文化研究所が復原したような総柱建物ではなく、身舎の棟通りに柱のない通常の構造であることが判明した。第二堂以下についても同様と推定される。なお、東第一堂と東面・北面回廊ともに、建設時および解体時の足場穴を確認している。また、これらの下層では、藤原宮の造営に先行する2時期の条坊側溝を検出した。ただし、四条大路以南には古い段階の条坊側溝がなく、その施工は部分的なものであったことが知られる。このほか、平安時代末～鎌倉時代の宅地にもなう遺構を多数確認し、中世の集落を研究するうえでも貴重な資料が得られた。

東方官衙北地区の調査(第108-5次)は、資材置場建設にともなう緊急調査である。10×2間の東西棟建物とそれに先行する東二坊坊間路の両側溝を検出した。この建物は、南側に並列する3棟の東西棟建物のうち中央のものと東西の妻を揃えており、官衙内の計画的な建物配置をうかがわせる。なお、この一画には、大炊寮を含む宮内省被官官司の存在が想定されている。

東北官衙と東方官衙北地区にまたがって実施した河川改修にともなう事前調査(第108-11次)では、南北棟建物3棟と東西塀1条、三条大路北側溝を確認した。うち、北側の東北官衙地区に属する2棟の建物は、桁行8間の同規模で、西側柱筋を揃えて南北に並ぶ。狭長なトレンチ調査であったが、当該地区の建物配置を復元するうえで重要な知見を得ることができた。

藤原京の調査は4件。公衆浴場建設にともなう左京二条二坊の調査(第109・108-7次)では、東一坊大路のほか、4時期に細分される藤原宮期前後の遺構を確認した。坪内道路により、坪を1/2ないし1/4に分割して使用した状況がうかがえ、建物も小規模なものが散在する傾向を示す。出土遺物を考えあわせると、金属製品ないし漆製品の工房として使われた可能性が想定される。

左京六・七条二坊の調査(第113次)は、溜池改修に

ともなう事前調査。藤原京関係の遺構として、六条大路と東二坊坊間路、五角形の横板組井戸などを確認した。また、それに先行する方位の振れた建物や溝、鎌倉時代の石組井戸も検出している。

飛鳥地域等の調査は7件。石神遺跡の調査(第110次)は、本遺跡で都合13回目にあたる学術調査である。東西方向の2条の石組溝と東西塀からなる区画施設がつくり変えられている状況を確認した。ともに斉明朝の区画北限と推定されるが、天武朝には、遺跡の北限がさらに北へ移動したことも明らかとなった。

吉備池廃寺の調査(第111次)は、5年にわたる計画的学術調査の最終年度にあたる。金堂の南と北に調査区を設定し、中門については、予想どおり金堂の前面に存在することを確認した。ただ、かなり小規模なうえ、位置も金堂心から西に寄っている。したがって、西方の塔前面にも中門をおく異例の配置をとる可能性が想定される。また、金堂の北方では、講堂や北面回廊は検出できなかったが、僧房とみられる大型の東西棟掘立柱建物が南北に並列することが判明した。これまでに発見されたなかでは最古の僧房遺構となる。

飛鳥池遺跡の調査(第112次)は、南に近接する酒船石遺跡との関係を究明するための学術調査である。炉跡の存在や出土遺物から、東側の谷筋に営まれた工房が南北130m以上の広がりをもつことが明らかとなった。あわせて、その上流にあたる酒船石遺跡とともに、一連の排水処理システムによって管理されていた可能性が想定され、両遺跡の緊密な関係をうかがうことができる。

なお、発掘調査にともなう現地説明会を実施した。実施年月日、担当者は以下の通り。

飛鳥藤原第107次(藤原宮朝堂院)

2000年9月9日

玉田 芳英

飛鳥藤原第110次(石神遺跡)

2000年12月23日

深澤 芳樹

飛鳥藤原第111次(吉備池廃寺)

2001年3月20日

箱崎 和久

平城京の発掘調査

2000年度に平城宮跡発掘調査部がおこなった発掘調査は、平城宮跡7件、平城京跡19件である。このうち、京内寺院の発掘調査が10件にのぼる。学術研究および史跡整備に関わる発掘調査は7件5,008㎡、住宅建設等による緊急調査は19件1,736㎡である。

平城宮内では、第一次大極殿院の整備に関連して、その内部を4次にわたり調査した。第313次調査では、既調査部分10カ所に調査区を設け、座標変換にともなう基準点の変異量を確認した。そのなかで、第一次大極殿院南門の基壇外側に敷いた凝灰岩製敷石痕跡を新たに確認し、第一次大極殿の復原に重要な示唆を与える成果を得た。第315・316次調査では、第一次大極殿院西面築地回廊とその西を流れる宮内基幹排水路を調査し、第一次大極殿院造営時の極めて大規模な造成の様子を明らかにした。特に第316次調査では、基幹排水路の改修と、その水源である園池の築造が、西池宮造営や第一次大極殿院全体の改造に密接な関わりをもつという所見を得た。第319次調査では、西面築地回廊西北隅を再調査し、西面築地回廊の複雑なねじれを確認した。

東院地域では、東院園池西北に流れ込む石組み蛇行溝の南端を調査した(第323次)。この調査により、東院庭園地区はそのほぼ全域の調査がおわったことになる。

平城京域では寺院の調査が多かった。特に興福寺では、その中核施設である中金堂(第325次)のほか、その門跡寺院である一乗院(第317・321次)、大乘院(第318・314-11次)の調査もおこなった。このうち、中金堂の調査は2001年度も継続しておこなうため、その説明は次の機会にゆずる。

一乗院では、過去に調査されている一乗院宸殿の南側(第317次)と南東側(第321次)を調査した。第317次では、遣り水遺構を検出し、文献に見える「金輪池」が宸殿の前面に存在する可能性が高くなった。第321次調査では、銅破片、銅滓など銅生産に関わる遺物が出土した。また、過去の宸殿の調査で出土し、重要文化財に指定された施釉陶器と一連のものともみられる二彩・三彩陶器が出土し、注目される。

大乘院では、池北西部付近(第318次)と旧大乘院御所西辺部(第314-11次)の調査した。池北西部では、様々な作庭技法をしめす遺構を検出した。

西隆寺では、回廊西南隅とその南側の調査をおこなった。回廊西南隅では、回廊の礎石据付穴と瓦積み基壇外装を検出し、回廊の規模を復原する重要な資料を得た(第324次)。また、その南側では、巨大な柱を2本立てる特殊な掘立柱遺構を検出した(第320次)。

寺院以外では、左京三条一坊七坪の調査をおこない、この地域の土地利用の様相を明らかにした(第314-7次)。

なお、発掘調査の現地説明会を実施した。実施年月日、担当者は以下の通り。

平城第312次(阿弥陀浄土院)

2000年4月15日

清野 孝之

平城第315次(第一次大極殿院)

2000年7月1日

吉川 聡

平城第316次(第一次大極殿院)

2000年9月15日

清水 重敦

平城第318次(旧大乘院庭園)

2000年11月18日

中島 義晴

建造物の調査と研究

古代建築の調査研究

従来から継続している本研究では、一昨年度から所内の共同研究として、これまでに蓄積された調査研究、発掘された建築部材、保存修復工事で得たデータ、現存古代建築の観察などをもとに、細部にわたる古代建築の技法の総合的な研究をおこなっている。当年度は木部調査を重点とし、現存する古代建築の小屋組、架構、天井などと、保存されている建築古材の調査をおこなった。

また新たに、わが国の木造建造物において初めての試みとして、三次元レーザスキャナーを用いた測量を唐招提寺金堂で実施し、破損・変形を捉えた断面図の作成に成功した。

平城宮建物復原実施にともなう調査研究

大極殿関係では、前年度に製作した五分の一構造模型と屋根葺き実験原寸瓦葺き模型にもとづき、細部の検討をすすめて復原案の調整をはかり、実施設計に反映させた。また大極殿院では、主として南門・東楼について、所内各分野の協力を得て検討し、構造形式の復原考察をまとめた。

木造建造物の保存修復のための調査研究

一昨年度から7年計画で発足した4部会からなるプロジェクトで、文化庁の協力による関係機関や大学との共同研究としておこなっている。部会1は保存修復の体制確立のための研究とし、多様化する文化財建造物に対処する新たな体制と組織の研究。部会2は保存修復に関する考え方と手法の研究として、過去の修復を評価するとともに、文化財保存修復の今後のあるべき考え方、方法をさぐる。部会3は参考となる海外の事例を調査研究する。部会4は保存事業にともない蓄積された学術資料の整理と保存活用方法の研究で、文化庁ほかに収蔵された保存修復時の資料を再評価し、今後の活用方法を研究するものである。

各地の史跡の整備事業への助言・指導

柳之御所跡（岩手県）、下野国分寺跡（国分寺町）、新居閑跡（新居町）、崇高堂（上野市）、近江国庁跡（滋賀県）、春日大社社殿（春日大社）、津山城跡（津山市）、上淀廃寺跡（淀江町）、などの遺跡整備における建物復原に関する助言・指導をおこなった。

各地の文化財建造物の修復事業への助言・指導

新宿御苑（環境庁）、大阪中央公会堂（大阪市）、泉布観（大阪市）、布引ダム（神戸市）、唐招提寺金堂（奈良県）、今井町（橿原市）、備中高梁城天守等（高梁市）、原爆ドーム（広島市）、周防国分寺金堂（国分寺）、山口県旧県会議事堂（山口県）、脇町南町（脇町）などの保存修復にあたり、助言・指導をおこなった。

歴史資料・書跡資料の調査と研究

南都諸大寺を中心に、各寺社で所蔵されている歴史資料・書跡資料の調査研究を継続しておこなっている。興福寺では、昨年に引き続き『興福寺典籍文書目録第三巻』に収録予定分（第61函～第80函）につき写真撮影を継続しておこない、第69函分まで終了した。撮影終了分は漸次焼き付け作成中で、作成焼き付けにより、目録原稿の確認をおこなう予定である。東京大学史料編纂所と調査を共同でおこなっている薬師寺は、木箱に収納されている28箱分については第26,27函のみなお調書作成作業継続中であるが、それ以外の函分は調書作成が完了したので、つぎの文書筆筭（第29函とした）に着手した。筆筭には引出が

25あり、収められている資料はほぼすべて冊子で、江戸時代の年預所日次記等である。なお薬師寺関係では、『奈文研年報 2000-I』などに法会関係資料の伝来状況について報告した。東大寺は、収蔵庫第4室にある未整理の聖教文書の整理をおこない、経巻を除く未整理聖教文書函113箱を調査対象とした調査計画を立てた。未整理聖教文書は、内容的には東大寺惣寺伝来のもの、塔頭や小綱職家から寄贈されたものなど多様なものを含んでいる。2001年度から研究課題「東大寺所蔵聖教文書の調査研究」で科学研究費補助金の交付を受けることになったので、その補助金も活用しつつ未整理分の目録作成を実現したい。西大寺は、奈良県教委担当の奈良県所在古版経調査に協力して、建仁寺版「梵網経菩薩戒本直伝」の調査をおこない、その紙背文書を紹介した。

その他文化庁関係調査で、醍醐寺聖教、仁和寺黒塗手箱聖教、寺から依頼を受けて石山寺知足庵聖教の調査に、参加協力をした。なお石山寺では資料叢書が継続編纂されているが、その『史料編第二』（2000.11刊）を奈文研現旧所員が協力し刊行した。

また滋賀県教委実施の長命寺文書調査、奈良吉野町教委の上田家文書調査がそれぞれ2000年度から3カ年計画でおこなわれることになり、その調査に参加協力をした。

所内では北浦定政関係資料の調査、写真撮影をはじめとして、溝辺家資料、小原文庫等の写真撮影をおこなった。

埋蔵文化財センターの研究活動

全国の埋蔵文化財の調査担当者に対する研修を開催するのみならず、各研究室、研究員がそれぞれ課題を決めて研究に取り組んでいる。また、各地で行われる発掘調査や遺物・遺構・遺跡の保存事業について、地方公共団体や関係諸機関からの要請に基づき、専門的・技術的な立場から指導・協力をおこなっている。その中から研究活動について、研究課題とその成果の一部を紹介する。

研究課題

遺跡・遺物の考古学的研究（遺物による考古史の研究・東亜陶磁の比較研究・古代官衙遺跡等の調査研究）、文化財の自然科学的手法による調査研究（動植物遺存体による環境考古学的研究・年輪による古気候と年代測定に関する研究・広域遺構探査法の開発研究）、文化財の自然科学的

法による保存修復に関する研究（常時微動測定による古建築の構造と保存に関する研究・有機質遺物の材質とその保存処理法の開発研究・古代遺跡の保存科学的研究）、文化財情報システムの構築と活用法の研究（劣化写真のデジタル画像による復原研究・文化財情報ネットワークにおける通信法の研究・全国不動産文化財情報システムの普及流通に関する調査研究・遺跡地図情報システムの開発研究）

東亜陶磁の比較研究

中国河南省で三彩窯跡分布調査と地形測量をおこなった。訪中研究者は5名、来日研究者も5名である。

古代官衙遺跡等の調査研究

官衙関係遺跡・豪族居宅関係遺跡について調査報告書等を約1,000冊調査し資料収集とデータベースへの入力作業をおこなった。また、研究集会「銚子をめぐる諸問題」を共同実施、正倉関係木簡資料の収集作業を開始した。

広域遺構探査法の開発研究

広域を迅速に探査する手法の開発のために、地中レーダー探査を用いた方法を主体に実施。国内では、窯跡と工房跡（五所川原市・青森県）、庭園と御殿建物遺構（姫路城・兵庫県）、甕棺墓（吉野ヶ里遺跡・佐賀県）などを対象に、それぞれ遺構の特定を試みた。海外では、イタリアでローマ時代皇帝の別荘において浴場と円形プール、都市遺跡において劇場跡の検出に成功した。

有機質遺物の材質とその保存処理法の開発研究

迅速かつ安定した処理法をめざし、超臨界点二酸化炭素を用いた新規保存処理法の開発研究をおこなった。FTIR（フーリエ変換赤外分光分析）法により、有機質遺物の材質分析を進め、データベースの作成に取り組んだ。

遺跡地図情報システムの開発研究

遺跡データベースに地図を付加するための研究をおこなった。当然、問題となるのはデータの入力であり、基礎となる資料の収集にも力を入れている。

国際学術交流

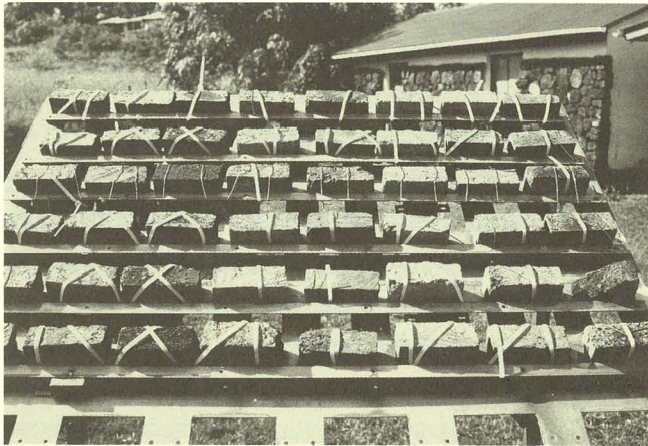
●河南省文物考古研究所との共同研究

本年度から新たに始まった事業である。河南省鞏義市大小黄冶村に所在する唐三彩窯跡およびその産品に関する共同研究であり、メンバーには、鄭州市文物考古研究所・鞏義市文物保護管理所の研究者も加わっている。本年度は、8～10月には中国側の研究者を招聘し、7月・12月には日本側が河南省を訪れ、現地踏査をおこない、互いに学術交流をはかった。本年度は、次年度以降予定の発掘予定地の地形図と窯跡の分布図の作成が主な事業である。

●環境による不動産文化財の劣化状況調査と保存修復に関する調査・研究

苛酷な環境における不動産文化財の劣化状況の調査と保存修復に関する調査・研究を2件実施している。ひとつは、カンボジア・アンコール遺跡に関連するタニ窯遺跡群の発掘調査とその遺構・遺物の総合的な共同研究である。あわせて、カンボジアの若手研究者を招聘し、発掘調査法・遺物の調査研究法・遺跡の保存整備に関する研修・保存科学に関する研修などを実施している。もうひとつの事業は、チリ領・イースター島におけるモアイ石像をはじめとする石造文化財の考古学的・保存科学的研究である。日本国内とは大きく異なる環境条件のもとに所在する古代遺跡の発掘調査、および保存整備・修復に関する調査研究、すなわちカンボジアやイースター島における遺跡の発掘調査や保存修復の成果は、我が国の遺跡のみならず世界各地に分布する遺跡の保存協力にも資することができる。

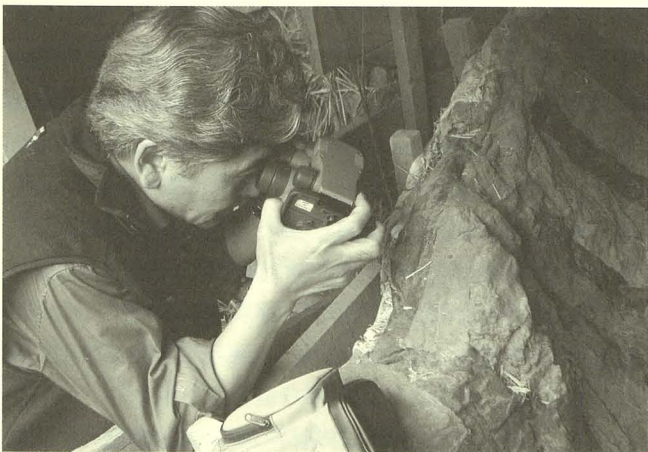
カンボジア・タニ窯跡群については、7月下旬から8月中旬（3週間）にかけて第3次の発掘調査をおこなった。さらに、11月・2月には出土遺物の調査、ならびに遺跡の追加調査をおこなった。また、若手研究者3名を60日間招聘し、研修を実施した。イースター島・モアイ石像の素材は火山性の凝灰岩であり、その劣化状態は極めて悪い。新鮮な部分ではその圧縮強度は80～150Kg/cm²程度だが、劣化の激しい部分では20Kg/cm²に満たないほどの数値を示した。このような凝灰岩を強化する材料として、ケイ酸エステルを基盤にしたものを用い、適宜アクリル樹脂・撥水剤のアルキルシロキサンなどを混合したものなど6種類を準備し、モアイ石像と同じ素材の凝灰岩を硬化し、暴露試験を実施した。



イースター島の屋外に設置された暴露実験台

●炳靈寺文物保管所と炳靈寺涅槃塑像の補修に関する共同研究

炳靈寺石窟は中国の著名な石窟寺の一つであり、中国甘肅省永靖県から南西へ約35キロの黄河の北岸に位置している。1960年代に、石窟から下流へ35キロ下った黄河にダム建設が予定された。水位の上がることによって、低いところにあるいくつかの石窟は全部浸水することになり、中国政府が資金援助して防護堤が修築された。もちろん、一部の洞窟内の文物に対しては移設がおこなわれた。そのひとつに大仏涅槃塑像がある。全長9mの中国最大級の塑像で、それは9分割されて現地から避難し、保護されてきた。その復原修理計画が持ち上がり、その接合・復原事業に協力することとして、修復材料の提示、塑像修復技術の交流をおこなった。2000年6月4日～6月8日、新補修材料について実験結果の検討会を甘肅省博物館文物保護研究室において実施した。検討会には、中国文物研究所科学技術部・敦煌研究院・故宮博物院科学技術部などが参加した。



涅槃塑像の保存状態の調査

在外研修の成果

古代の国家支配における都市と交通路に関する研究

井上和人／平城宮跡発掘調査部

文明の中心地から遠隔の地にあった一丘陵地帯に盤踞するローマ族が須臾のうちにイタリア半島、地中海世界さらに西欧大陸の大半を支配するに至った営力が何であったか、それを尋ね究める旅であった。

人類が種を保持するには、数百人規模の種族集団で完結するという。ローマの場合、おそらく飢餓に起因する種族衰亡を避けるための行為としての略奪を契機として、集団の殻がうち破られることになる。外圧に対抗するための防衛と、より有効な防御手段である先制攻撃の反復の中で、土木技術にすぐれた能力、経験をもっていたローマ族が圧倒的な戦闘能力を発揮しはじめた。以後の様々な歴史的紆余曲折は当然の事ながら、ローマは自乗的に版図を拡大し続ける。支配領域の拡大を促進し、維持を保証したのも卓越した土木技術であり、その先端的な表れとしてのローマン道路、ローマンウォールそしてローマの生活様式を完璧に移植しようとした植民都市の建設であった。

武器・武具に関する研究

小林謙一／埋蔵文化財センター

2000年7月27日から2000年10月14日の間、連合王国、ギリシャ、エジプトを訪れ、主として、ギリシャ・ローマ時代の武器・武具の変遷を辿り、日本における変遷の要因との比較を中心に、調査・研究をおこなった。

ギリシャにおける金属製防禦具の出土は、現在のところ、紀元前1400年頃まで遡るが、資料が増加するのは、紀元前6世紀を中心とする時期になってからである。ギリシャの防禦具は、基本的に、1対1の戦いを前提とした武装であった。ローマ時代になると、新たな攻撃用武器の出現に対して、mail armor や scale armor に替わり、strip armor が開発される。また、長方形盾の導入は、この時期、戦闘が個々の兵士の戦いから、集団による戦いへと変化した状況をうかがわせる。騎兵と歩兵で、武装に基本的な差はなく、馬を用いた戦闘も、戦車から騎兵主体に移行する。このように、ローマ時代は、武装と戦闘方法において、画期をなしていた。

海外からの招聘者一覧

- 韓国：国立海洋遺物展示館 遺物保存研究士
金 益柱／'00.6.5～6.18
- アメリカ：ポートランド州立大学 人類学科教授
ケネス・エイムス／'00.6.23～7.14
- 韓国：三星文化財団湖巖美術館保存研究所
許 佑寧／'00.6.26～7.9
- 中国：遼寧省文物考古研究所 所長
王 晶辰／'00.7.5～7.19
- 中国：遼寧省文物考古研究所 副所長
李 新全／'00.7.5～7.19
- 中国：遼寧省文物考古研究所 研究員
李 勇軍／'00.7.5～7.19
- 中国：中国社会科学院考古研究所 研究員
谷 飛／'00.7.17～9.13
- 中国：中国社会科学院考古研究所 研究員
石 自社／'00.7.17～9.13
- 中国：浙江大学 助教授
鄭 雲飛／'00.7.24～'02.7.23
- チリ：チリ国立保存修復センター 主任研究員
モニカ・バーモンデス／'00.8.5～8.20
- 中国：河南省文物考古研究所 副所長
秦 曙光／'00.8.21～8.30
- 中国：鄭州市文物考古研究所 副所長
王 文華／'00.8.21～8.30
- 中国：鞏義市文物保護管理所長
劉 洪森／'00.8.21～8.30
- 中国：河南省文物考古研究所第三研究室
副研究員
趙 志文／'00.8.21～10.14
- 中国：河南省文物考古研究所第三研究室
助理研究員
劉 海旺／'00.8.21～10.14
- 中国：中国社会科学院考古研究所 所長
劉 慶柱／'00.8.30～9.13
- 中国：中国社会科学院考古研究所 副研究員
顧 智界／'00.8.30～9.13
- 中国：中国社会科学院考古研究所 科研処
副処長
劉 凱軍／'00.8.30～9.13
- インドネシア：ジョクジャカルタ特別区文化財保護局
ヌクプラセツヤ マスクール／'00.9.18～9.22
- 中国：河南省文物管理局 副主任科員
張 慧明／'00.9.18～9.22
- アメリカ：ネブラスカ大学人類学科 教授
ピーター・ブリード／'00.10.4～10.8
- 韓国：湖巖美術館附設文化財保存研究所
研究員
姜 昌求／'00.10.10～10.31
- ガーナ：国立博物館 主任学芸員
オボク・アチャンボン／'00.10.11～'01.4.10
- 韓国：国立慶州文化財研究所 学芸研究士
李 相俊／'00.10.13～10.25
- 韓国：国立慶州文化財研究所 学芸研究士
李 恩錫／'00.10.13～10.25
- カンボジア：プノンペン王立芸術大学（卒業生）
CHEA Sarith／'00.10.16～12.2
- カンボジア：プノンペン王立芸術大学（卒業生）
Uch Kangkerya Pheakdey／'00.10.16～12.2
- カンボジア：プノンペン王立芸術大学（卒業生）
Heng Chhun Oeurn／'00.10.16～12.2
- 韓国：国立扶餘文化財研究所 学芸研究室長
金 容民／'00.10.18～10.25
- ネパール：国立博物館 学芸課長
B.R. ラワット／'00.10.20～10.31
- 韓国：国立文化財研究所所長
趙 由典／'00.10.30～11.3
- 中国：陝西省考古研究所 保衛科長
劉 煥学／'00.11.6～11.18
- 中国：陝西省考古研究所 編集室長
李 自智／'00.11.6～11.18
- 中国：陝西歴史博物館 助理研究員
羅 黎／'00.11.6～11.18
- 中国：陝西歴史博物館 唐墓壁画研究中心画家
袁 継軍／'00.11.6～11.18
- 中国：中国甘肅省博物館 文物保護部 副部長
張 健全／'00.11.6～11.20
- ミャンマー：文化局考古部員
Daw Sanda Khin／'00.11.8～12.20
- 中国：国家文物局博物館部 科技教育処・科員
刀 道勝／'00.11.8～12.23
- アメリカ：スミソニアン研究機構 材料研究
教育センター 主任研究官
パメラ バンディバー／'00.12.1～12.11
- 中国：文物研究所 文物保護科技中心副主任
嵇 益民／'00.12.5～12.19
- 韓国：国立文化財研究所 学芸研究士
李 鐘勲／'00.12.12～12.27
- 韓国：国立文化財研究所 学芸研究士
申 熙權／'00.12.12～12.22
- 韓国：国立慶州文化財研究所 学芸研究官
金 聖範／'00.12.12～12.18
- 韓国：国立慶州文化財研究所 学芸研究士
黄 仁鎬／'00.12.12～12.18
- カンボジア：アンコール遺跡保護地域整備
当局 調査員
Ea Darith／'00.12.18～12.26
- アメリカ：ニューヨーク市立大学 クイーンズ
カレッジ 助教授
牧原 美紀／'00.12.18～12.26
- ドイツ：チュービンゲン大学 先史・古代史・中世考古学部 教授
ハンスピーター・アープマン／'01.1.8～2.10
- アメリカ：フロリダ州立大学 教授
グレン・ドラ／'01.1.9～1.11
- 韓国：圓光大学校 人文学部 副教授
崔 完奎／'01.1.15～6.14
- アメリカ：スミソニアン研究機構 フリアー
サッカー美術館 主席研究員
チェイス・W・トーマス／'01.1.25～2.9
- 韓国：忠南大学博物館 研究員
韓 辰淑／'01.1.31～2.3
- アメリカ：ジョージワシントン大学人類学
科教授 / スミソニアン研究機構 国立自然史
博物館研究員
Alison Brooks／'01.2.8～3.13
- アメリカ：デーバー大学 考古学部 教授
Lawrence. B. Conyers／'01.2.14～2.18
- イギリス：ケンブリッジ大学地球科学学科
客員研究員
Immo Trinks／'01.2.14～2.25
- イタリア：国立文化財応用技術研究所
ローマ支部 主任研究官
Salvatore Piro／'01.2.14～2.23
- オーストリア：ウィーン大学 考古科学研
究所 教授
Wolfgang Neubauer／'01.2.14～2.20
- フランス：パリ第6大学 応用物理学部
助教授
Michel Dabas／'01.2.15～2.20
- 韓国：湖巖美術館保存科学研究所
許 佑寧／'01.2.20～2.23
- 韓国：国立扶餘文化財研究所 所長
崔 孟植／'01.2.23～2.25
- 韓国：国立全南大学校 助教授
白 志星／'01.2.23～2.25
- 中国：遼寧省文物考古研究所
呂 学明／'01.2.24～3.24
- 中国：陝西省考古研究所 所長
韓 偉／'01.3.19～3.28

奈文研研究者の海外渡航一覧

- 沢田 正昭：中国
'00.4.5～4.13 / 中国・クムトラ千仏洞遺跡調査（ミッション）のため 先方負担 ユネスコ北京事務所
- 高妻 洋成：チリ共和国・アメリカ合衆国
'00.4.23～5.6 / 過酷条件下にある文化財の保存修復に関する現地調査と資料収集のため 海外文化財調査等外国旅費（異なる環境条件下における不動産文化財）
- 黒崎 直：韓国
'00.5.23～5.27 / 日韓初期都城の形成と発展過程に関する調査研究及び資料収集 海外文化財調査等外国旅費（都城）
- 小林 謙一：韓国
'00.5.23～5.27 / 日韓初期都城の形成と発展過程に関する調査研究及び資料収集 海外文化財調査等外国旅費（都城）
- 西村 康：イタリア
'00.5.29～6.15 / アルチナッツォ遺跡及びフォーラムノビウム遺跡における地中レーダー探査 科学研究費
- 肥塚 隆保：中国
'00.6.4～6.8 / 炳靈寺石窟大仏涅槃塑像の修理に関する日中共同研究 科学研究費
- 黒崎 直：中国
'00.6.7～6.11 / 中国遼寧省文物考古研究所との共同研究に関する打合せ及び調査研究（アジアにおける古代都城遺跡の研究と保存に関する共同研究） 政府開発援助海外文化財調査等外国旅費（都城）
- 小林 謙一：中国
'00.6.7～6.11 / 中国遼寧省文物考古研究所との共同研究に関する打合せ及び調査研究（アジアにおける古代都城遺跡の研究と保存に関する共同研究） 政府開発援助海外文化財調査等外国旅費（都城）
- 高瀬 要一：韓国
'00.6.9～6.15 / 「東アジアにおける古代庭園遺跡の調査研究」にともなう現地調査、研究打合せ 科学研究費
- 小野 健吉：韓国
'00.6.9～6.15 / 「東アジアにおける古代庭園遺跡の調査研究」にともなう現地調査、研究打合せ 科学研究費
- 川越 俊一：韓国
'00.7.10～7.14 / 韓国出土ガラス等の資料調査 海外文化財調査等外国旅費（生産遺跡）
- 松村 恵司：韓国
'00.7.10～7.14 / 韓国出土ガラス等の資料調査 海外文化財調査等外国旅費（生産遺跡）
- 花谷 浩：韓国
'00.7.10～7.14 / 韓国出土ガラス等の資料調査 海外文化財調査等外国旅費（生産遺跡）
- 金子 裕之：韓国
'00.7.11～7.13 / アジア地域における放射性炭素年代測定法の信頼性向上のための古年輪資料調査のため 科学研究費
- 金子 裕之：中国
'00.7.20～7.23 / 東アジアにおける生産遺跡の調査研究協力打合せ 政府開発援助海外文化財調査等外国旅費（生産遺跡）
- 巽 淳一郎：中国
'00.7.20～7.23 / 東アジアにおける生産遺跡の調査研究協力打合せ 政府開発援助海外文化財調査等外国旅費（生産遺跡）
- 小林 謙一：連合王国 ギリシャ エジプト
'00.7.27～10.14 / 武器・武具に関する研究 文部省在外研究員旅費
- 深澤 芳樹：韓国
'00.8.3～8.10 / 大韓民国西部地域における無文土器でタタキ技法の存否を検討する 科学研究費
- 森本 晋：カンボジア
'00.8.3～8.11 / タニ窯跡群の発掘調査 海外文化財調査等外国旅費（異なる環境条件下における不動産文化財）
- 高橋 克壽：韓国
'00.7.18～7.22 / 学会参加と日韓墳墓資料の収集 研究代表者負担 科学研究費
- 杉山 洋：カンボジア
'00.8.2～8.7 / アンコール文化遺産保護共同研究現地調査のため 海外文化財調査等外国旅費（異なる環境条件下における不動産文化財）
- 沢田 正昭：アメリカ合衆国 ハワイ
'00.8.5～8.13 / イースター島太平洋研究国際会議において「イースター島・モアイ石像の現地保存のための火山性凝灰岩保存材料の耐候性に関する研究」の発表 科学研究費
- 西村 康：カンボジア
'00.8.9～8.26 / シェムリアップ州所在窯跡の調査 海外文化財調査等外国旅費（異なる環境条件下における不動産文化財）
- 杉山 洋：カンボジア
'00.8.18～8.27 / アンコール文化遺産保護共同研究現地調査のため 海外文化財調査等外国旅費（異なる環境条件下における不動産文化財）
- 田辺 征夫：韓国
'00.8.25～8.29 / ソウル、公州、扶余の都城遺跡の臨地調査と慶州新羅王京の調査に関わる協力についての打合せ 海外文化財調査等外国旅費（都城）
- 木村 勉：ドイツ連邦共和国
'00.8.26～9.7 / 産業遺産の保存に関する現地調査及び情報収集 研究代表者負担 科学研究費
- 町田 章：中国
'00.7.27～8.1 / GISを用いた古代都城の排水システムに関する統括的研究及び「21世紀の中国考古学と世界考古学」会議出席 科学研究費
- 花谷 浩：韓国
'00.8.27～9.9 / ソウルおよび新羅王京（慶州）の調査研究 海外文化財調査等外国旅費（都城）
- 中村 一郎：カンボジア
'00.8.18～8.27 / アンコール文化遺産保護に関する研究協力 海外文化財調査等外国旅費（異なる環境条件下における不動産文化財）
- 沢田 正昭：韓国
'00.11.23～11.26 / 慶州文化財研究所主催の国際学術大会における発表のため 先方負担 韓国国立慶州文化財研究所
- 肥塚 隆保：韓国
'00.11.23～11.26 / 慶州文化財研究所主催の国際学術大会における発表のため 先方負担 韓国国立慶州文化財研究所
- 沢田 正昭：中国
'00.9.8～9.15 / 中国古代壁画の資料収集（甘肅省博物館）唐代壁画の調査研究、並びに復原的研究（陝西省歴史博物館・考古研究所） 科学研究費

●肥塚 隆保：中国

'00.9.8～9.16 / 中国古代壁画の資料収集 (甘肅省博物館) 唐代壁画の調査研究、並びに復原的研究 (陝西省歴史博物館・考古研究所)
科学研究費

●高瀬 要一：中国

'00.11.17～11.26 / 「東アジアにおける古代庭園遺跡の調査研究」による洛陽・西安地域における古代庭園遺跡の調査 科学研究費

●小野 健吉：中国

'00.11.17～11.26 / 「東アジアにおける古代庭園遺跡の調査研究」による洛陽・西安地域における古代庭園遺跡の調査 科学研究費

●川越 俊一：韓国

'00.10.9～10.13 / 出土ガラス関係資料の調査 科学研究費

●西口 壽生：韓国

'00.10.9～10.13 / 日韓初期都城の形成と発展過程に関する共同研究のため 海外文化財調査等外国旅費 (都城)

●肥塚 隆保：韓国

'00.10.9～10.13 / 日韓初期都城の形成と発展過程に関する共同研究のため 海外文化財調査等外国旅費 (都城)

●小池 伸彦：韓国

'00.10.9～10.13 / 日韓初期都城の形成と発展過程に関する共同研究のため 海外文化財調査等外国旅費 (都城)

●石橋 茂登：中国

'00.11.4～12.7 / アジアにおける古代都城遺跡の研究と保存に関する研究協力 政府開発援助海外文化財調査等外国旅費 (都城)

●連沼 麻衣子：中国

'00.11.4～12.7 / アジアにおける古代都城遺跡の研究と保存に関する研究協力 政府開発援助海外文化財調査等外国旅費 (都城)

●千田 剛道：中国

'00.11.11～11.25 / アジアにおける古代都城遺跡の研究と保存に関する研究協力 政府開発援助海外文化財調査等外国旅費 (都城)

●山崎 信二：中国

'00.11.20～11.25 / アジアにおける古代都城遺跡の研究と保存に関する研究協力 政府開発援助海外文化財調査等外国旅費 (都城)

●浅川 滋男：中国

'00.11.23～11.27 / アジアにおける古代都城遺跡の研究と保存に関する研究協力 政府開発援助海外文化財調査等外国旅費 (都城)

●高妻 洋成：中国

'00.10.26～11.1 / 過酷な環境条件下における遺構断面の転写法の開発ならびに大型出土木製品の真空凍結乾燥に関する共同研究 科学研究費

●西村 康：韓国

'00.10.30～11.4 / 文化財研究所 (韓国) において講演および現地探査 先方負担 韓国文化財研究所

●松井 章：韓国

'00.11.6～11.16 / 韓国出土の動物遺存体の観察、DNA および炭素・窒素同位体分析のための試料サンプリングのため 科学研究費

●豊島 直博：中国

'00.12.2～12.10 / アジアにおける古代都城遺跡の研究と保存に関する共同研究 政府開発援助海外文化財調査等外国旅費 (都城)

●綾村 宏：韓国

'00.10.30～11.4 / 東アジアにおける生産遺跡の調査研究協力 渡航費：政府開発援助海外文化財調査等外国旅費 (生産遺跡)
滞在費：韓国国立文化財研究所

●村上 隆：アメリカ合衆国

'00.12.15～12.20 / 2000 環太平洋国際化学会議 (PACIFICHEM2000) において研究発表を行うため 科学研究費

●高橋 克壽：中国

'00.12.5～12.11 / 東アジアにおける生産遺跡の調査研究協力 政府開発援助海外文化財調査等外国旅費 (生産遺跡)

●川越 俊一：中国

'00.12.5～12.11 / 河南省文物考古研究所との共同研究 (考古科学の総合的研究) 科学研究費

●小林 謙一：中国

'00.12.2～12.10 / アジアにおける古代都城遺跡の研究と保存に関する共同研究 政府開発援助海外文化財調査等外国旅費 (都城)

●牛嶋 茂：中国

'00.12.2～12.10 / アジアにおける古代都城遺跡の研究と保存に関する共同研究 政府開発援助海外文化財調査等外国旅費 (都城)

●巽 淳一郎：中国

'00.12.5～12.11 / 河南省文物考古研究所との共同研究 政府開発援助海外文化財調査等外国旅費 (生産遺跡)

●深澤 芳樹：韓国

'00.12.13～12.16 / 第9回文化財研究国際学術学会参加のため 先方負担 韓国国立文化財研究所

●町田 章：韓国

'00.12.13～12.16 / 2000 年度文化財研究国際学術大会出席のため 海外文化財調査等外国旅費 (都城)

●井上 直夫：カンボジア タイ

'00.12.9～12.16 / アンコール文化遺産保護に関する研究協力 海外文化財調査等外国旅費 (異なる環境条件下における不動産文化財)

●杉山 洋：カンボジア

'00.12.9～12.16 / アンコール文化遺産保護共同研究現地調査のため 海外文化財調査等外国旅費 (異なる環境条件下における不動産文化財)

●森本 晋：カンボジア

'00.12.13～12.19 / タニ窯跡群の調査研究 海外文化財調査等外国旅費 (異なる環境条件下における不動産文化財)

●西村 康：カンボジア

'00.12.9～12.17 / ①バイヨンシンポジウムへ参加、シュムリアップ州所在窯跡の調査について研究発表すること ②上智大学と共同してアンコール・トム遺跡からバンテアイ・クデイ遺跡へ基準点を移設する 海外文化財調査等外国旅費 (異なる環境条件下における不動産文化財)

●高瀬 要一：カンボジア

'00.12.9～12.14 / アンコール遺跡群・タニ窯跡群保存整備計画立案に関する調査研究 海外文化財調査等外国旅費 (異なる環境条件下における不動産文化財)

●館野 和己：イギリス

'00.12.10～12.24 / 大英図書館所蔵チベット語木簡の調査 研究代表者負担 科学研究費

●沢田 正昭：カンボジア

'00.12.9～12.14 / アンコール遺跡・タニ窯跡保存整備に関する調査研究 海外文化財調査等外国旅費 (異なる環境条件下における不動産文化財)

- 井上 和人：連合王国 ドイツ イタリア
'01.1.2～3.22 / 古代の国家支配における都市と交通路に関する研究 文部省在外研究員旅費
- 浅川 滋男：中国
'01.2.12～2.19 / 中国における水上居住に関する資料収集 科学研究費
- 小野 健吉：アメリカ合衆国
'01.2.25～3.4 / 日本庭園英語辞典に関する成果公表（庭園考古学研究会） 科学研究費
- 金田 明大：大韓民国
'01.2.26～3.2 / GISを用いた古代都城の用排水システムに関する総括的研究のための資料収集 科学研究費
- 神野 恵：大韓民国
'01.2.26～3.5 / GISを用いた古代都城の用排水システムに関する総括的研究のための資料収集 科学研究費
- 中島 義晴：大韓民国
'01.2.26～3.5 / GISを用いた古代都城の用排水システムに関する総括的研究のための資料収集 科学研究費
- 小野 健吉：ニュージーランド
'01.3.11～3.22 / 日本庭園用語の英訳に関する研究協議・成果公表 科学研究費
- 清水 重敦：中国
'01.3.5～3.25 / アジアにおける古代都城遺跡の研究と保存に関する研究協力 政府開発援助海外文化財調査等外国旅費（都城）
- 吉川 聡：中国
'01.3.5～3.24 / アジアにおける古代都城遺跡の研究と保存に関する研究協力 政府開発援助海外文化財調査等外国旅費（都城）
- 浅川 滋男：中国
'01.3.12～3.15 / アジアにおける古代都城遺跡の研究と保存に関する研究協力 政府開発援助海外文化財調査等外国旅費（都城）
- 田辺 征夫：中国
'01.3.12～3.18 / 古代都城における用排水システムのデータ収集 科学研究費
- 小澤 毅：中国
'01.3.12～3.24 / 漢長安城の共同発掘調査 科学研究費
- 村上 隆：アメリカ合衆国
'01.3.12～3.24 / スミソニアン研究機構との国際共同研究「アジア地域における陶磁器の流通に関する自然科学的研究」のための調査・及び研究打合せ 科学研究費
- 高瀬 要一：ベトナム
'01.3.18～3.25 / 窯跡など遺跡保存状況調査 科学研究費
- 中村 一郎：中国
'01.3.12～3.24 / アジアにおける古代都城遺跡の研究と保存に関する研究協力 政府開発援助海外文化財調査等外国旅費（都城）
- 沢田 正昭：韓国
'01.2.22～2.25 / 考古科学研究の資料収集と研究打合せ 韓国国内遺跡出土の漆製品に関する資料調査とその分析と保存 科学研究費
- 森本 晋：フランス
'01.3.12～3.17 / アンコール遺跡群関係資料の調査 海外文化財調査等外国旅費（異なる環境条件下における不動産文化財）
- 巽 淳一郎：アメリカ合衆国
'01.3.12～3.24 / スミソニアン研究機構との国際共同研究「アジア地域における陶磁器の流通に関する自然科学的研究」のための調査・及び研究打合せ 科学研究費
- 西村 康：フランス
'01.3.12～3.17 / アンコール遺跡調査関連資料収集のため 海外文化財調査等外国旅費（異なる環境条件下における不動産文化財）
- 田辺 征夫：大韓民国
'01.2.24～3.1 / 日本出土原史古代繊維製品と関連する韓国内出土資料の調査及び集成のため 研究代表者負担 科学研究費
- 杉山 洋：タイ ベトナム
'01.3.14～3.25 / バンコク及びベトナム周辺の窯跡調査 科学研究費 海外文化財調査等外国旅費（異なる環境条件下における不動産文化財）

公開講演会

第86回公開講演会 2000年5月13日

◆内田和伸：近代における古代遺跡の保護と顕彰

明治末期から大正8年(1919)の史蹟名勝天然紀念物保存法の制定までの、奈良県および京都府における古代の寺院跡と宮殿跡の保護と顕彰について具体的状況を紹介した。

明治期には寺院の礎石を庭園の伽藍石として転用することが流行し、古代寺院跡の破壊にもつながった例もみられた。こうした中で明治41年(1908)の大安寺西塔跡の保存整備は最も早い時期のものであった。

古代宮跡では、明治28年(1895)の平安遷都千百年紀念祭などが契機となって平安宮、長岡宮、平城宮、藤原宮、大津宮、恭仁宮などで遺跡の保護と顕彰がはじまり、古代天皇制の象徴的な施設である大極殿の跡が目目された。高揚するナショナリズムの中、明治32年(1899)の貴族院議会で皇室の権威伸張を意図した「御歴世宮趾保表ノ建議」が可決され、顕彰に弾みがつき、明治36年(1903)には長岡宮跡で大極殿遺址来拝所が新設されるなどした。しかし、遺跡保存は地元の保存会任せで問題も生じていた。

第87回公開講演会 2000年10月21日

◆長尾 充：継手と仕口 山田寺から明治建築まで

日本の木造建築技術のうち、部材の接合法である継手と仕口について、歴史的展開を概説した。木製部材の接合は先史時代に遡るが、古代建築の継手と仕口は、7世紀中葉造営の山田寺東面回廊の建築出土部材に求めた。この出土材はまとまった資料として最古例に属し、各部の技法は、現存する古代建築と同等以上の技術を示す。中世には、大仏様に見える構造に即した形、禅宗様の装飾化に即した目立たぬ形として再移入される。書院造りと数寄屋造りでは、構造材と化粧材の明確な分離の上に洗練が進む。近世初頭の城郭建築では大断面部材に中世的な技法も再現された。近世は技術の爛熟期で、大工家伝書等は職人技を競うような継手と仕口を見せる。明治初期の洋風建築も伝統技法が支えており、特に官庁営繕記録中の建築仕様書によれば、ボルト等の洋風技術を採用しつつも、標準的な部位は伝統的技法が占める。また継手と仕口の仕様を全く記さない例もあり、既存の技法に依存していたこと等を述べた。

◆次山 淳：土器からみた初期大和政権

考古学の立場から政治史にアプローチする試みとして、土器を材料とすることで集団の関係と構造に着目し、前方後円墳の出現に象徴される初期大和政権のありかたを検討した。まず当該期の畿内の土器について様式構造と技術基盤、その成立過程を説明し、弥生時代から古墳時代に、むしろ内的な要素である土器作りの技術が外来要素に置換することを指摘した。次に土器移動の問題を取り上げ、畿内から他地域、他地域から畿内、双方向の動きを比較検討した。時系列でみると両者共に、移動先や移動元の重心が西日本から東日本へと変化することが認められた。さらに古墳造営集落の土器の特質についても言及した。

以上の検討から、地域連合といわれる初期大和政権における集団間の関係や構造を具体的に読み取るとともに、埴輪や古墳築造労働力などの視点を加え、吉備・山陰・東海など他地域の集団が、等質の関係ではなく階層性をもって構成する姿をそこに想定した。

発掘調査現地説明会

- ◆ 2000年4月15日(土)
平城第312次(法華寺阿弥陀浄土院)
平城宮跡発掘調査部 清野 孝之
参加者: 386名 調査面積: 355㎡
- ◆ 2000年7月1日(土)
平城第315次(平城宮第一次大極殿院)
平城宮跡発掘調査部 吉川 聡
参加者: 296名 調査面積: 975㎡
- ◆ 2000年9月9日(土)
飛鳥藤原第107次(藤原宮朝堂院)
飛鳥藤原宮跡発掘調査部 玉田 芳英
参加者: 500名 調査面積: 3140㎡
- ◆ 2000年9月15日(金)
平城第316次(平城宮第一次大極殿院)
平城宮跡発掘調査部 清水 重敦
参加者: 400名 調査面積: 997㎡
- ◆ 2000年11月18日(土)
平城第318次(旧大乘院庭園)
平城宮跡発掘調査部 中島 義晴
参加者: 165名 調査面積: 1140㎡
- ◆ 2000年12月23日(土)
飛鳥藤原第110次(石神遺跡)
飛鳥藤原宮跡発掘調査部 深澤 芳樹
参加者: 630名 調査面積: 440㎡
- ◆ 2001年3月20日(火)
飛鳥藤原第111次(吉備池廃寺)
飛鳥藤原宮跡発掘調査部 箱崎 和久
参加者: 1000名 調査面積: 1140㎡



現地説明会(平城第315次)

研究集会

◆官営工房研究会

2000年12月15日

通算9回めを数える官営工房研究会。今回は高橋照彦氏(奈良国立博物館)「古代の三彩・緑釉陶器生産」、保坂智子氏(栃木県上三川町教育委員会)「上神主遺跡とその文字瓦」、田熊清彦氏(栃木県埋蔵文化財センター「下野国内とその文字瓦」、大橋康夫氏(同)「上神主遺跡と水道山瓦窯」の4本の報告をめぐって活発な討論、意見交換をおこなった。

◆古代律令国家の須恵器の調納制を考えるII

2000年11月25~26日

開催目的は、都城出土須恵器を徹底的に群別し、それぞれの群の産地を各地の研究者とともに検討し、古代における須恵器の調納制の十体を明らかにすることである。11月25・26日に開催、須恵器研究者約35名が集う。都城側から5本、生産地側から3本の研究報告をおこない、活発な意見交換がなされた。

◆保存科学研究集会

2000年12月7日

「出土木製品の保存処理における諸問題」をテーマに、保存科学研究集会をおこなった。今回の研究集会は、「出土木材の保存処理研究において、学会などで報告される事例は良好な結果の得られたものばかりであるが、むしろ失敗例を報告し、問題点とその対応を共有することが望まれる」とのコンセプトにもとづいておこなわれた。研究集会では、まず、当研究所埋蔵文化財センター長・沢田正昭氏より、「過去・現在・未来」という演題で日本における出土木製品の保存処理の歴史、現状および将来の展望について基調講演がおこなわれ、続いて、元興寺文化財研究所保存科学センター長・増沢文武氏より「出土木材の保存処理で生じた問題点と対応」と題する特別講演がおこなわれた。研究発表では、専門家から保存処理の事例、失敗例、解決策などの保存処理の現場において大いに役に立つ報告がおこなわれた。ポスター発表では、各自治体などにおいて実際に保存処理に従事する方々から、多くの事例を紹介していただいた。保存処理の失敗の中には、いまだその原因が究明されていない問題も多い。今後はこれらの問題についてさらに研究を進める必要がある。失敗例を報告するということはきわめて困難なことではあるが、それらをあえて報告

し、問題点と解決策を広く共有することができたことはきわめて意義深い。



保存科学研究集會発表風景

◆遺跡GIS研究会

2000年11月26日

埋蔵文化財センター情報資料室では、2000年11月26日、遺跡GIS研究会を「考古学GISの現状と課題 考古学における空間分析法と情報の共有化」のテーマのもと開催した。本年度で第5回目となるこの会は、GIS（地理情報システム）の考古学分野での応用を研究する会で、文部省科学研究費の成果などの研究発表のほか、機器やソフトの展示も行い盛会であった。

会は、まず奈良大学の泉拓良氏が科研費の概要を説明、森本が「発掘調査と空間データ 奈良国立文化財研究所を例として」をおこなった。昼食後、九州大学の宮本一夫氏が「欧米における考古学GIS」を発表後「考古学における空間分析法」と題したパネルディスカッションをおこなった。その後、東京大学の貞廣幸雄氏が「クリアリングハウスとメタデータ」、奈良大学の碓井照子氏が「考古学におけるクリアリングハウスとメタデータ」を発表した。

文部省科学研究費助成研究

◆考古学の総合的研究

代表者・沢田正昭 COE形成基礎研究 継続

1998年度から始まった考古学の研究拠点形成の研究は、3年目を終えた。本研究は、遺跡調査法研究部門・環境考古学研究部門・古年輪研究部門・保存科学研究部門の4部門の研究課題に沿って実施している。

◆古文書料紙原本の基礎的データ測定記録装置の研究製作

代表者・綾村 宏 基盤研究(A)(1) 継続

本研究の目的は、古文書料紙の縦横の法量、厚さ、重さ、色調を測定記録し、古文書自体の画像を記録する装置を製作することであるが、最終年度である今年度測定記録装置は完成した。装置の重量などいくつかの改良点はあるが、今後この装置を使用して料紙のデータを収集するとともに、出来るだけ範囲で装置をより修正していきたい。なお装置の仕様など記載した冊子を作成した。

◆GISを用いた古代都城の用排水系統に関する総合的研究

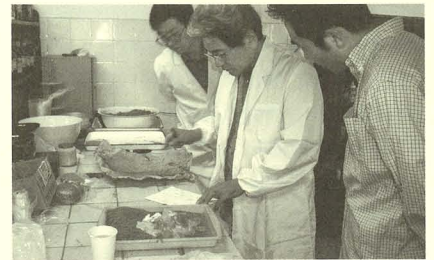
代表者・田辺征夫 基盤研究(A)(2) 継続

本研究は2年目を迎えた。昨年実施した奈文研調査分の平城京条坊側溝計測データの収集に引き続き、奈良市教育委員会実施分の条坊遺構データの収集、整理を進め、平城京城の標高デジタルモデルの作成作業を続けている。また排水路としての溝遺構の土木工学的評価作業を平城宮内検出の基幹排水路遺構をモデルに試みた。これまでの研究成果と展望について10月に東京・工学院大学で開催された地理情報システム学会において発表した。

◆唐代古墳壁画の転写・輸送・保存修復に関する科学的研究

代表者・町田 章 基盤研究(A)(2) 継続

墓室からはぎ取られた壁画の総合的調査とその劣化防止・壁体の強化・はぎ取り技術などの開発研究をおこなった。唐代壁画顔料の接着剤に関しては、中国で70年来の実績を持つ、桃ヤニの可能性を示唆。はぎ取った壁画の背面を強化する素材を検討。古代顔料の分析結果をもとに色見本カードを作成し、その耐久性について測定。



唐代壁画・塑像の保存実験

◆アジア地域における陶磁器の流通に関する自然科学的研究

代表者・沢田正昭 基盤研究(A)(2) 継続

スミソニアン研究機構・フリヤー美術館の陶磁器コレクションのうち、クメール陶器について化学分析の共同研究を実施。美濃・瀬戸・九谷・唐津などの窯跡出土品、消費地出土品など約260点の陶磁器片の分析。ベトナム・タイ・カンボジアなどの陶磁器の分析。国際研究発表会をワシントンDCで開催(1999年3月8日)。

◆動物考古学的方法による日本、および周辺地域における古代家畜史の研究

代表者・松井 章 基盤研究(B)(1) 新規

縄文、弥生遺跡から出土した動物遺存体の中で、家畜の可能性のあるイノシシ・ブタの骨を選び、DNAや炭素・窒素安定同位体による食性分析をおこなった。11月6日から16日まで韓国を訪問して、プサンからソウルまで主要研究機関を訪問し、主として原三国時代(1~3世紀)の遺跡から出土した動物遺存体を実見し、ブタ・イノシシ、ウシ、ウマなどの骨を選別して、その計測を行い、DNA、安定同位体分析用のサンプルを採取した。その結果、3世紀段階で、豚の飼育、骨の利用技術について韓国が日本に大きな影響を与えていることを明らかにできた。



韓国慶州出土のウマの頭蓋骨
(三国新羅時代 嶺南文化財研究院発掘)

◆東アジアにおける古代庭園遺跡の調査研究
代表者・高瀬要一 基盤研究 (B)(2) 新規

日本、中国、韓国における古代庭園の系譜を明らかにする研究の初年度。中国と韓国の計12箇所の遺構について調査担当者に面接し情報をつつめた。また、2001年2月24・25日には日本と韓国の庭園史研究者、庭園遺跡発掘担当者などをあつめてシンポジウムを開催し、情報交換と意見交換をおこなった。

◆中世後半から近世における瓦生産の研究

代表者・山崎信二 基盤研究 (C)(2) 継続

本州における中世末から近世前半の瓦を、中世末期、近世Ⅰ期(1575～1583)、近世Ⅱ期(1583～1591)、近世Ⅲ期(1591～1607)、近世Ⅳ期(1607～1640)、近世Ⅴ期(1640～1680)に細分した。製作技法上はⅠ期初頭に鉄線切りの普及があり、Ⅴ期末に軒平瓦の瓦当上縁における中央幅広の面取りが消失する。

◆銚子の規格性からみた律令位階推定法の確立

代表者・松村恵司 基盤研究 (C)(2) 継続

平城京の銅銚にみられる規格性が、全国出土の銚帯に貫徹し、その寸法差が位階差に対応するか否かの検討を目的とした研究。最終年の本年度は、3ヶ年の研究成果をとりまとめるべく、2000年11月16・17日に研究会「銚帯をめぐる諸問題」を開催し、研究者間で位階表示機能の存否をめぐる討議を行った。全国出土銅銚集成は約2000点に達し、あわせて海外の関連資料も収集した。集会記録は来年度に刊行予定。

◆馬具副葬品古墳の階層性と地理的分布に関する研究

代表者・花谷 浩 基盤研究 (C)(2) 継続

中期以降の古墳で、副葬品の中に馬具を含むものと無いものがある。しかも、馬具を副葬する古墳の数は地域によって大きな偏差があることが知られている。この現象が何に起因するのかを知りたいと思った。馬具副葬古墳の資料を収集しデータベース化をおこなうと、数と規模は地域や古墳群によっていくつかのパターンにわかれ、古墳数の少ない地域では大型古墳に集中するケースがある。これらは、各地域での権力構造や軍事編成に直結する可能性が高い。

◆日本庭園・庭園史関連用語の英語訳に関する研究

代表者・小野健吉 基盤研究 (C)(2) 継続

三年間にわたる研究の最終成果として、『和英対照日本庭園用語辞典』(Bilingual [Japanese & English] Dictionary of Japanese Garden Terms)を刊行した。本書の見出し項目は、552項目。各項目は、見出し項目を和文・和文訓み(ひらがな)・ローマ字・英文で示し、解説文を和文および英文で付し、必要に応じて図版を添えた。300部を印刷し、国内外の関連研究機関・研究者に配布した。また、米国・ハーバード大学ダンバートンオークス研究所およびニュージーランド・リンカーン大学で研究成果公表をおこなった。

◆古代東アジアにおけるガラス生産の基礎研究

代表者・川越俊一 基盤研究 (C)(2) 継続

今年度は、日韓出土のガラス製品の比較検討の為、関係資料を収集し、一部データベース化するとともに、韓国出土のガラス製品、砲弾ガラス罎埴、小玉用鋳型を実見し、調査をおこなった。韓国出土については約100遺跡からの出土資料の整理を終了したが、日本出土品は莫大な量に及ぶ為、西日本出土品を中心に整理作業を進めている。

◆弥生時代タキ技法の波及経路

代表者・深澤芳樹 基盤研究 (C)(2) 継続

本年度は、本研究の第2年目にあたり、さらなる資料の充実をはかった。日本国内での検討はもとより、大韓民国でも南海岸部と西海岸部を訪ね、研究者との意見交換をおこない、あわせて資料を見学した。その結果、弥生土器のタキ技法は、韓半島西南部地域の土器に同一の技法があつて、これに由来する可能性が高いことが判明した。

◆歴史的な建物の活用にとまなう保存修復の具体的なあり方の研究 一事例集と指針の作成

代表者・木村 勉 基盤研究 (C)(2) 継続

活用をとまなう近代建築を主とした指定文化財全般の歴史的建造物の修復を対象にして、あらためて保存の基本理念を整理・確認するとともに、活用事例を具体的な修理方法に及んで分析し、検討のうえ保存修復の適切なあり方を指針案として示した。

◆古代ガラスの色調と材質に関する科学的研究

代表者・肥塚隆保 基盤研究 (C)(2) 継続

本年度は日本で出土しているインドパシフィック系ビーズに着目した調査・研究をおこなった。ムチサラは弥生時代後期の遺跡から少量が出土しており、高アルミナソーダ石灰ガラスで作られている。インド・アリカメドゥを起源とすると推定された。

◆超臨界点乾燥法を用いた有機質遺物の新規保存処理法の開発

代表者・高妻洋成 基盤研究 (C)(2) 継続

出土木材を超臨界点乾燥法により保存処理するための最適条件を検討するため液化炭酸流量と乾燥度の関係を検討した。冷却した液化炭酸を流入させ、100気圧昇圧後40℃まで昇温して所定時間静置した後減圧した場合は、含水率の高い出土木材の方が乾燥しやすいこと、および所定時間液化炭酸を流通させたあと減圧した場合には液化炭酸の量が多いほど乾燥が進むことが明らかとなった。

◆古代金属系の材質と製作技法の歴史的変遷に関する材料科学研究

代表者・村上 隆 基盤研究 (C)(2) 継続

金属系の歴史的変遷を探るために、現代の金糸の製作技法を調査した。また、わが国で出土した古代金糸の製作技法の背景には、厚さ10～30μmの金製薄板製作の重要性があることを確認することができた。さらに、細型の金製耳環が金薄板を応用した製作技法によって作られていることをはじめて解明し、これを「金薄板積層形成法」と名づけた。

◆日本古代宮都の官衙配置の研究

代表者・渡邊晃宏 基盤研究 (C)(2) 新規

平城宮の官衙配置を考察する基礎資料として、木簡・墨書土器を始めとする出土文字資料のうち、宮城の構造を考える素材となる史料を抽出して整理する作業をおこない、出土遺構と合わせて当該地の性格を考察した。また、続日本紀など奈良時代の文書史料から、平城宮などの都城関連史料を抽出する作業をおこなった。

◆古代の非鉄金属生産の考古学的研究

代表者・小池伸彦 基盤研究 (C)(2) 新規

本研究は、古代手工業生産の基盤を支えていた金・銀・銅・鉛・錫・アンチモン地金の生産様式の解明を目的とする。今年度は佐渡西三川砂金産地、対州鉱山、伊予市之川鉱山等の踏査を実施、関連資料を収集した。また、長登銅山跡・平原第「遺跡出土の鉛製錬・精錬関連資料の調査をおこない、検討を加えた。

◆古代の穀穀収取に関する考古学的研究

代表者・山中敏史 基盤研究 (C)(2) 新規

郡衙正倉および古代豪族居宅関係遺跡について、調査報告書掲載の総柱高床倉庫遺構のデータを収集するとともに、柱穴の形状に留意した土木工法の類型区分の作業を始めた。また、穀穀収納倉庫の具体的な規模・構造などのわかる文献資料や木簡の収集作業を進め、一部「郡衙正倉関係史料集」(『郡衙正倉の成立と変遷』(奈良国立文化財研究所発行))として公表した。

◆中世室生寺の復興

代表者・箱崎和久 奨励研究 (A) 新規

北京律僧である空智房忍空(1232～1318)は、後宇多法皇の帰依を受け、延慶元年(1308)に室生寺灌頂堂を建立した。舍利信仰の高揚とともに復興する室生寺は、忍空の人脈により、関東の北京律寺院とも密接な関係があると考えられる。

◆古墳時代における軍事組織形成過程の研究

代表者・豊島直博 奨励研究 (A) 継続

古墳から出土した鉄製武器を集成する作業を進め、実測図の作成と写真撮影をおこなった。畿内では武器の変遷を明らかにし、畿内以外の地域でも、武器の形態や組み合わせの変化に畿内との共通性を確認した。ただし、古墳時代前期における武器の副葬量や、中期における武器副葬古墳の規模や分布には地域差が見られ、軍事組織の地域差について考察する手がかりを得た。

学会・研究会等の活動

◆木簡学会研究集会

2000年12月2・3の両日、第22回木簡学会研究集会が奈良国立文化財研究所平城宮跡資料館講堂においておこなわれた。2日は、何双全「敦煌懸泉置遺跡の発掘—漢代の駅と木簡」、犬飼隆「7世紀木簡の国語史的義」の2本の研究報告、3日は、山下信一郎「2000年全国出土の木簡」、清水みき「長岡京東院跡出土の木簡」、湯川善一「石川県津幡町加茂遺跡出土の木簡」の3本の事例報告があった。また、『木簡研究』第22号を刊行した。(編集担当 吉川 聡)

(渡邊晃宏)

◆条里制・古代都市研究会

2001年3月3～4日の両日、第17回条里制・古代都市研究会大会が奈良国立文化財研究所平城宮跡資料館講堂にて開催された。3日は、「大宰府・多賀城・斎宮—調査・研究の最前線—」を大会テーマとして、今泉隆雄「多賀城の創建—郡山遺跡から多賀城へ—」、井上信正「古代大宰府街区の変遷」、山中章「斎宮の「都市」計画—方格地割の計画方法—」の3本の研究報告とコメント、討議がおこなわれた。4日には、徳島市観音寺遺跡(阿波国国府推定地)、滋賀県草津市野路岡田遺跡、石川県津幡町加茂遺跡、長岡京右京六条一坊、平安京右京三条二坊十六町の発掘調査成果が報告された。(山中敏史)

◆埋蔵文化財写真技術研究会

2000年7月7～8日に第12回総会および研究会をおこなった。

7月7日：総会 参加者146名(含む委任状)・講演参加者79名「デジタルカメラのメリット、デメリット」(川瀬敏雄氏：(株)堀内カラー)

7月8日：講演 参加者126名「銀塩のオリジナル性とデジタルの多様性」(大橋正清氏：(株)日本写真印刷)「報告書レイアウトの実際」(戸村雅英氏：(株)ドラマックス)・公開講座「デジタル・アナログ疑問点」(玉内公一氏：コメント(株))

今年の研究会では報告書印刷におけるデジタル技術の適用や利用範囲など、主にデジタル技術の利用に関して発表・討議をおこなった。(中村一郎)